

「えっ！マヤ？」



ケンはおもわず、さけんでしまいました。マヤが、にじいろかがやちょう虹色に輝く蝶になっていたのです。

びっくりしたケンは、「あのとき、エルムがわけてくれたはなみつ花の蜜のせいだ。それをすったから、マヤはちょう蝶になってしまったんだ。」と思いました。

「どうしよう…。どうすれば、マヤをもとすがたもど元の姿に戻せるんだろう…。」

ふあん不安になったケンは、エルムに

「エルム。お願いだから、マヤをねがもとすがた元の姿にもどしてよ。」

ケンは、おおこえひっしただの大きな声で必死に頼みました。でも、エルムはなにいちょう何も言わずに、蝶になったマヤと一緒にはなみつうすぐらもりなかき薄暗い森の中へと消えていってしまいました。ケンはエルムをさがもりなか森の中へ

はい入りました。



「エルム。エルム。」

おおこえよ大きな声でエルムを呼んでみました。でももりなかひびこえ森の中に響くのは、ケンの声だけです。

「こわ怖いよ…。エルム、マヤ、どこ…。どこにいるの？」

ながまん泣きそうになるのを我慢して、ケンはもりなかさがある森の中をエルムとマヤを探して歩いていきました。

すると、ひかりみ光が見えてきて、たくさんのはなごえき話し声が聞こえてきました。

「だれ誰がいる！！」

ケンは、おもはしだ思わず走り出しました。

